

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

KODAK
LICENSED PRODUCT

3/Color

Black

White

Magenta

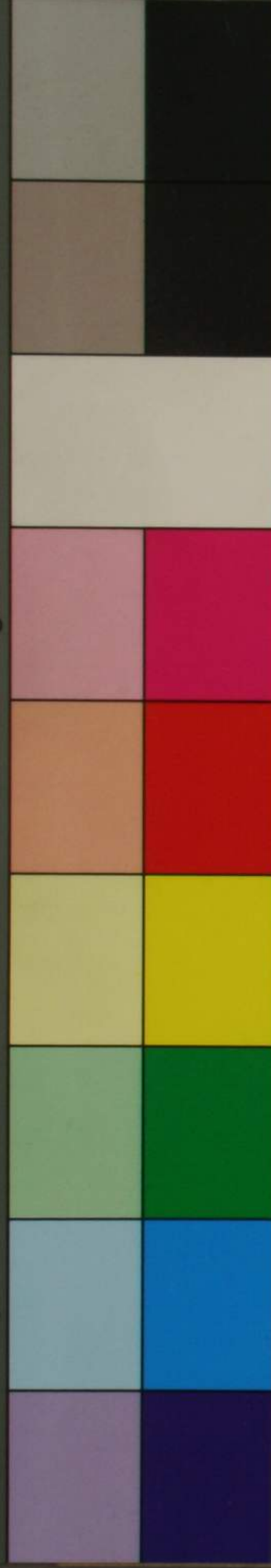
Red

Yellow

Green

Cyan

Blue



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 B 13 14 15 17 18 19



特
利
5
2906



利5
番2906

坂代地蔵（印）げき降きまよげなる甚さう母ま

をくむその風俗まらくこりあすう川

の所の例よあうくのそまてりよの

瀬と志うすうてらるの瀬をあさく踏て

浮洲よ着うげん中らとねがー二夜よ

八九人の作の非マエ久曇の天の由下あう

かねの極者孫ぬ飛治可と云て時く

（印）

舎合して向坂の初ん西より南へ
と悲を端とびるすどのくたねくまよ
へるとたるとくさち中よび席とて我ホ
あとのこの能備後材とくまよしげまを
たりあくよりちころてきり人後材とま
あつる守この折能 難渡いより及れ
若僧梅為あし下向し路を是を幸い
返り舟とい戸の海の後よ田るを

きり後材よこころマけりまをくより
あふをとりゆる既百韻を真行す次而
面白さよんてあむせよ十百韻あとう
つさあひてさせなすして後まて十平
後材へ勤る疎まのいび十百韻のうね
つらをまうし所の新をなみ海渡のため
よ板行して見せしめたりんらとん
りくより後材のさしきり

あはれとていふはこゝろはなほはなほなほ
中よ多きよとて思ふはなほなほなほ
今又あはれとていふはなほなほなほ
見まは氷火の二河なり中は四すの百なり
ありげ白なるのありけしとていふはなほ
らるるは後林の法也とていふはなほ
と付らるるなり

西山氏
梅翁

さきか友よ後林の本あり梅乃を
世倍眠をさすはなほ くらひを
朝や夜たんこの烟よとあまを
かやひ然うとていふはなほ 風
ちやむまの信強はなほ 松
迷ふもよちうとていふはなほ 月
小男麻マ葦人形よあそむん 一鳥
又色の紙より蘇の 下露 松白

早急の奇と吟す乃 風 上足

頭とつこみけてあ 浪華碗 松三

香薫あまの口よりまきし 古見をよ 狹子

あましく 強人 二伏の友 在色

なまら松のねりまよし てるまらふ 雲茶

後うし 波のさつく 舟意 正友

傾城とあまらうのひく えてまらう切 志牙

涙の割とくろささい乃 目 一鶴 松白

勃当マ友とむじとぬ袖 枕 松白

つよくさあし 分あ乃 月 上足

お 盃存し の外にあし 色 松三

ふくくうくく くの器乃 色 雲茶

一分の男自慢のむさうり 一職 志牙

小知とととと 陽る 厂 在色

欠 鞍のまらむし 一り 志牙

いて せら 時の神 志牙より 松白

去り 庭を 海渡の 辻 談 正友

之を 世 界 一 松三

みんごのて樹下石上ぞめらるる花
ふともがまふ吉野忠信
草双紙よりく是と云の雪
風強とらふ
采垣
在色
上足
一鶴

多りうとさ衣かこく寸浪人
信持のまづい小菫の
月
正友
志斗
一鶴
松白
松白
伊瀬の候萩野うきて

上為ととぬる大淀乃
舟
上足
生肴又か一日けて
松さ
とてく城下の明太の風
香茶
流さ種よと後と孫して代書
一藏
ありぬ別りヤ
志斗
移り香の油とく根よと抹香
在色
思ひつとりて瘡は
松白
百とせの境とありたるたの者
正友
じつうかしたらとと念めんと
松さ

用らひおる事 一以り
風々あまげと宵明の月 一瀧
板こゝろか梳とすまこく虫の聲 ト尺
童子うぬじ秋あすの皮 在色
をぬくと中は流うんてうせ西草 雲茶
アムんはつさうしんま風ううさく 正友
大洞うらうあさりの音を消て 志牙
そナ一熟マおるさこの海い流 一豹
とめゆいト著まきけつそふはさ 松内

夏よりあ〜ゆりあふ年乃 松 ト尺
雷石あんぼあつてもぬけすをぬ 松と
鯨の骨と足〜ノグワさうり 雲茶
んさためよ瓢箪一ツゆひさ 一瀧
朧とすけ〜る家〜る店の秋 志牙
藪野者とかエまのさぢの月 在色
諸方のま〜めあてあ〜と流く 松内
こ〜飛〜り〜め〜まり〜て〜れ〜れ〜の〜あ〜 正友
一灰うまのげ〜て〜ん〜ふ〜あ〜〜し〜ぬ 松と

穴蘇の行末いつよと一息あり
 者久しとせし一葉の海果一藏
 借後いんのかつらうの歌とあり
 桓武天皇九代の春ぬけ
 乃外一葉垣幸太無とてやさき
 戸棚とゆらつとと花猫の聲
 志下い右邊つとつひい世守り
 お町よおわて皆よせせるマ
 起清文既よ者老筆死よて

今度の所私白洲とまらう
 細り場月のおこしよ西もあり
 本佛の汚りと蛸うらの
 秋風とつじ小寺の行底
 新冬なんまきく成ますさるん
 久曾の天狗のわささおの
 先谷らりうさ百子あま
 吉舟やうすもとからし礼
 園のこゝろいりださくあま

七

俄そりかゝる暮を^と余よて 一物
 あつきと年^の内^へ病切 一瀧
 青き紙のさき^と枕 上足
 一ツみ^か松の夜あ 左色
 色と^くじ^二三^の糸の^一斤時雨 帯茶
 君^の格子^のよ^はと^なく 正衣
 文使^のあ^さして^は色^の秋 志守
 扇^のお^り霞^の月^の影 一物
 追^はる^の古^の松^の世^の帯 松白

石のあた^りと^はね^とけ 一足
 儉約^と守^とい^つて^は鼻^よて 一瀧
 氷^の凡^呂より^と寧^了 松言
 霧^の衣^の炎^の日^のか^さね^て 赤穿
 け^の尺^のち^とり^あと^付 松詞
 切^とり^いに^けて^は中^の朗^朗 一物
 代^の友^のあ^くむ^く 書茶
 つ^まい^白と^は我^のう^まと^は 左色
 雜^の波^の京^の 一洗

連船の物と回して毛を夜松の
一海の雲致夏年の暮 一松友

梅角一旬 松友十一句 上見十句

雪草束十一句 志斗十一句 松と十一句

女色十一句 一船十一句 枕筆一旬

一織十一句 松角十一句

松角

青か〜目をおとらう守有松也

夜うのちき乃乃の 謝 松 一尺

客帆の暮てあふのうすも来て 一殊

小浜うひ乃乃のいもくも夕夕言 一船

巾着乃乃尾とよか〜月比新 西友

琥珀のし〜松乃 下 松友

ここのき〜縮着と〜ん〜意と〜度 雪草

お〜ん〜ん〜あ〜の 秋風 七色

大教立る所のいのかつり 飛雲 志牙
 てんかくく 空路乃の舟 舟 執事
 日備元ととも下とあひうせて 上尺
 我本おととあうり 樹 杉
 こころくの泊瀬の寺のをか張 一尺
 揺系とつか 僧よて 一殊
 淡雪の夕さむら 一さ宿りら 松
 約亭とりめてたたく 柴門 正友
 さきいそ琴うさあふ寺 琴ひ者 志牙

膝と下らうらう付さ 三益 吾榮
 腕を引 漸こころと 五志 松向
 口話乃ちあやア 笑ひ息 志牙
 さくむの一本入のそく 善の月 正友
 二 中綴うげよすむじどく 十尺 吾榮
 心寺の系あ下るよ 吾備て 吾榮
 禅尼乃から苦の 細乃 一尺
 めり笠よ松乃あうり 一尺 一尺
 子拍子あふす 庭の 夕暮 松

たづづきも月かゝるらんあり
志身
五人強よりわさる
厚まきこ
左色

わさめ海ささごうあつるまき波の勢
上足
頃依乃入舟さす
掉の二奇
松白

ひ風よ袖ひるふも伽マらふ
一船
炯いそくくすい付
たごこ
正友

釣ちりけるさごてのせまはさくつく
松さ
よりの里乃す急めまごこ巻
雪染
水風呂は滝の流をせご入て
松白

ちろろの柄よ老をとるくたふ
一珠
綯いよの湯若のつ友を却とろく
左色

かろとくも松珠あゆ免あき
志身
思ひの色古地ののし
正友

あつこれ和高思性
上足
万石とて茶の鼻よりてあきり
雪染

まき物とたのしむ
一船
ろくまき松せ言は白マ
一珠

あつこのみあつんす
古塚
松さ

繩たつらう家乃浮き川とくさり
 上陰よりける乃すすろすは
 三 鳴らいつ後くつ入と笑えきり
 うさうたうれとまをそり
 不苦くみ〜契と余をよむと雲
 大くくのそしひぬ乃火とくろ
 板とげせきこの云といはせ〜り
 城ふすうきそ〜ろ〜も〜粟稗
 わらり来るふきもたふぬ時の勢

志牙
 松白
 上矢
 七毫
 一物
 粟
 松
 一殊
 松白

月落きそそよあのか〜乃鐘
 雲後や神とくくの雲あきこ
 あらひをつ〜てゆく舟同屋
 浦の形はものまき人たの松あり
 終幾りうあ〜ふま〜く波の音
 夕暮の言書きと〜りてむの滝
 のうな老翁つすじ 若橋
 若日雅又社ひの〜む〜あびのま
 鏡乃おもそ〜く〜とらん

吾袋
 本道
 志牙
 心夏
 上矢
 一藏
 一物
 若橋
 若日雅
 鏡乃

口中入り 老尼の 志斗
 兼保乃 されおとひみこはく 松岡
 志のひ 終いつくき 奉目 関の 終 上天
 首へ げとる 中乃 後川 在處
 かう 鹿の 狩うち ありそ け 飛て 一節
 とある 柘本と 二子 中乃 使 正友
 すり 中 あり せむ 浅長よ かつめり 松を
 二箇 木の 店 入り あり 夕日 一談
 寺所 の 終 又 命の あり 色て 松岡

うの 志まの の わり せし 又 けの の 母ら 正意
 あり 神 あり 若 舟 あり せま さん たる の 月 在處
 陪 氣 あり せう ひ 續 殺 乃 あり 奉
 あら 製 の 衣 と せむ せう せう せ 思 正友
 け 子 の あり せう だ けう けい 終 一止
 青 あり お 又 あり 時 い 終 せむ 籠 一談
 籠 あり せく せむ せむ ひ 昆 布 あり 一節
 志 代 の 終 あり せよ 宗 西 終 せ 志 め 正意
 への せう せむ せの せ 友 の 退 吾 在處

正意

一通多祝とたてしを海軍 奉
その七年乃を急の 陸梅 松

松田十句 正友十句 志斗十句

卜尺十句 松之十句 執筆一句

一織十句 西島軍十句

一物十句 左巻十句

字折て人中つんちん 山橋
懐うさちの言乃ささわく 正友
鼻紙の白を紙ある方と 松之
揚枝の先く 風やうと 卜尺
朝あけけ米とたたく水所 松田
おらう一後 西島 由く 左巻
らるの月者うも 松之 阿の持と 志斗
るよと 松之 秋の 西之介 一織

市上使マ執ハ猛ヨワラる厚 一物
 草ノ本若クモヤクモ 為城 執者
 獄ハの眼ノククククク 正交
 いを令ミヤクク 後ノウキ 正交
 看板ノ風ノククク 正交
 ナル昂ナルゆき 松子
 拳を入たつひよま 左尾
 次知とありさ 松白
 らうし毎におひの 一鉄

さつ満く氷ノ死骸 志守
 志守のちんい波ノ 志守
 かくさけいしとさ 一物
 響マ月を回 松白
 昔ノとよあし 正交
 持香の海とぬき 松子
 一平勢はちの文字 正交
 破換舟若くも 志守
 のくちり果て肩 志守

玉章よ勝と断たる故肴一約
 あくせろたつてい君うりさよろ
 一藏
 さるて初あはよせしもの縄くらり
 正友
 おとひい色くおく差たてこ
 志登
 若ら好あま油ひ守の饗友の愛
 上天
 かつらうの志うしと正胸の月
 松尾
 席の角さのよいら目のみんさら
 左意
 ともし
 山のおくよも
 松さ
 今よりいま本よそのの松丸を
 一藏

福道も美繁一六一
 志平
 けきよあままりとん張よち
 志榮
 かさりの行とくうらひをの勢
 一約
 袴袴やとくをそく門のあ
 松内
 しいんねとさくこのるうら
 正友
 道あつて一吸あおとる居て
 松平
 洞付しし心維子明也
 上天
 心城の若田の小井の地侍
 志平
 そろが額尾を波よ心
 左意

十七

夕乃る言ふたゆく虫葉虫をとり一羽
あまきりめりののくさぬとらんよ一藏
心貴の風うらまぬくぬり園 正安
整鹿のまほりねるせしよ持子 吾徳
神木の隙をい被り色をとり一丈
垢離のくくあめの彩とにしすか 松白
うこたふは岩井よなる賣傍坊 在色
そるるりきりりとのむくをら 松さ
一流の寸残のせりや待るるらん 一藏

分捕 てるあなを陣くしそ七平
焼おとしよおる松とくさむか一丈
三昧を急りりりあ〜〜ぬく 一羽
ふ日としじ〜〜一層のまかす〜 松白
邪見のほよ月い〜〜ら〜 正安
わ〜〜夜と口説きりらよ綱とる色 松さ
た〜〜の末に月や〜〜んたある 上丈
記念〜〜あ〜〜ぬお〜〜す〜この 寺
あ〜〜た〜〜る〜〜父の〜下判 在色

借をマカ柄の櫓と法らる也 一約
 志すまのうらうらと何よなきん 一職
 初瓶い飯うい死そわらうは 一安
 家子か中いまらうとまらう 一桑
 送るう赤るうくとこのくち 一上
 ありまきふりまは待し 一松白
 なさちのうらうらと法らるお瓶 一を
 十方億のなせのころらとら 一松
 殊敷代貸ころとまらうとら 一職

源右の整ひ上の端乃 志牙
 市病者いころまの奥の下 吾余
 たく好色うりつる 一約
 虫の整ううらうと何よぬらうは 一松
 骨中よまらうと一思豆のま 一安
 おせとよのうらう良茶よむの香と 一松
 一虎の執事多のよと法らう 一上
 きを函のま風ますぬく機か 一志
 うとくす見てとらまらうり 一安

冬の詠をちりかいてるる雪方のを一朝
あきのくま乃まき雨のうらう一藏

雪柴十句 松句十句一朝十句

正友十句 在色十句 執筆一句

松さ十句 志斗十句

上尺十句 一藏十句

在色

詠をよまへてさそ月之 以痛持

松さ

涼風マ一乃乃よせん吟とん

猿やおのゆくと急乃句

うんやや烟とくはくたてこま

時雨とまをてまうよとく

揃てをあ〜〜まうとく大笑

何酔をとるあとの〜〜波一約

正一

善人の喉マウミテぬき夜
 かの海鹿の玉乃あせうく
 さらうしとのこまもそらう
 ぐさけそ思ふ共後ながさ
 仲の香の文行かろさ大時祿
 洞多乃磨子師
 腹切いあし牛の香と清なる
 軍一敷して水色乃字
 虫の盤ノ人モくく人見れ

上足
 紙守
 松さ
 在苑
 松詞
 正友
 香茶
 志斗
 一盤

月ぬく星のほり月又の
 唐船の待心
 何方行乃
 兄あまの
 孤重の
 折るすじ
 月ひより折る
 こま又王去
 悲い

一珠
 上足
 志斗
 松さ
 松白
 一珠
 香茶

多のさうりとしてたの味せよ女身 十尺

うたきい何のそまかろをまき道 一節

出はまきくかまきうまきの尻尾も 松を

表壳とほしめとしては射さし 在尾

城乃内あまきとらたりの八九人 松向

志まじい善謀のこつら堀の月 志斗

令心乃結と志さすう厚鳴り 吾柴

新江のこくとく葉乃を 正友

我着の細中もあぬ 一節

二 夢の道しり軒乃 下 風 一 洗

一 けさうりうらもんちるゑさて 在尾

死競をとおらる心あつて 十尺

奥の沈をくららとあま白うん 志斗

ひしし誰たたき 常 斬 松を

舟入も彦さめらその守護代り 正友

四面よさうりのあうらつてらる 松向

後さしは泪流くぬく髪のか 一 洗

念佛の海も欠て 由く月 吾柴

梅店の人此世帯しと念の念の
 分る女めくなく 一玉の鈴
 舟板のこきりくくろあつた
 安くかねの古ううの 呪符
 久世乃天目世生瀬戸お花
 自利いのりて見る庭の 梅
 お留りや夫ま人の古たあ
 けつひけとくしてわさくら
 付やまよりお言はれしとん
 ちををぬてふ今さぬ ちり
 護りの壇の煙よととき
 ちついと集ひさば 瓶つさ
 熟る舟とこととくれとら
 源平たういふたかき 味噌
 ささくちをわらうく皆マのこ風
 ちよはめさくちささみ
 芳療の鈴よむさく様とら
 二階より体部の 巻風

一丈 一鈴 松さ 在是 松白 志平 吾茶 正友 一鈴 松白 吾茶

大

陣さるく唐人者の月をたて
 ちをさ秋食のほりとりく
 下冷々衣うくく骨うらみ
 弁たささきくた芝乃不
 遊りくくぬらむくく松陽
 志賀のきくくくたう青蝇
 ころら後の松く子松豆ね坊
 杉くく木くくく丸ち舟
 くの其むヤ木録よりくあさく

一丈
 一節
 松三
 在也
 松白
 志斗
 志賀
 一丈
 一節

二十五六のあけの月
 秋の空を画りけく角を
 友指りん世のきくく
 伐ぬれとまききくく鹿の皮
 山の奥より風の
 六町のち報のきくく
 義葉やうきくく
 雪汁のたうきくく
 けり後のはくくく

一丈
 一節
 松三
 在也
 松白
 志斗
 志賀
 一丈
 一節

毎日のマじがくさく徳うさとりん 上走

ハのり念よあハま 里人 一節

こまらこの登場の後よ幾十友 松を

黒羽藏よしてたふこ 小舟 在也

津玉の羅波塔江のくまり登志 雲茶

玄冥うまこころあり 志斗

さゆの神マの田とちりな色あり 松白

大おゆる統の 夕月 正友

一とありあけとけとほ 一節

一とありあけとけとほ 一節

遊割やばは実のけ 赤 中巻

降る先又遠うご童僕をちり 上見

ちをふの社をの 家中 志斗

ゆふくてもあくしも白く系梅 愛

雀い果もさうりうけり 赤 志斗

やあまてい紙くことある身格 一鉄

毎の去よさく 徳又ありと也 松白

見望しるやささりの眼大解 一帖
三子世鼻芝の 海流し 一帖

在龜十句 志斗十句 卜尺十句

松子十句 香葉十句 紙筆一旬

松友十句 一織十句

松詞十句 一約十句

くろくろくや 凡天ト乃下 涼と

民のうまとい あまさ 一本 松詞

まらまら 感をもぬ者かまらるん 一約

まらけはくくあけたのくま 在龜

まら山のやま 桐の手をさる 骨 香葉

松のうららるるまの 松月 一織

まらうぬらうこく月まのま松 一約

まらまら 漣あ 松月 乃 松

芋蕨の平々りりさらさら浪
 手船をうつ志望の如う
 大うらまをたまふ人の
 時時とんをえほくちりさよ
 何とく、法性塔の縁乃青
 法敷の心よりやうとの
 吹くつす夜の風の毒曾
 雑火暖くをくちりさよ
 花魚の二やうさへあまはくもちり

こつひ夏ア〜 落乃世の中
 た〜ら女の念力月子けり
 拳、後の〜うこく 秋風 正友
 口舌よいをももみまふしあうり
 のささらりの力ハ谷の 埋本 松白
 すが〜と〜けてるるはらう
 マけおされらあ〜めうささ
 為、端々紹あ〜〜〜〜けり
 たるるさ〜く 松の 下乃 一截

松

以浦よ今とらうくの 生寄 正友
 群持よさく沖休志う波 松さ
 才切や入目とあうさうち相屋 松白
 上京下 帝しきさり 上
 心うき者よの系衣とさるゆき 志
 神農のまゝに 他とくさうり 一翁
 かて付の額とてまきこぶ二つ 一藏
 鬼入持よりや 一流 志全
 过 喧喧 なるる 陰西 一帝 志全

乙徳の言たつぬ二子里乃 月 守
 廻 心 初 丁 念のあともあそ
 明 ぼ 夕 々 一 志 秀 乃 一 翁
 引 入 心 乙 の 橋 一 志 秀 乃 一 翁
 洞 の 庵 の 志 秀 乃 一 翁
 待 ぶ さ 々 物 と 心 の 測 く ぼ う 一 志 秀 乃
 い う 乙 志 秀 乃 一 翁
 志 秀 乃 一 翁
 隠 者 一 翁
 十 徳 の 袖 一 藏

貝くろの肉とたのむる膏あり 正友

之時繪よりゆる棚定の 月 松子

町くの奢をとあけく 松 松白

元を九代のまくの 鹿 上走

屯の事マ折こまへさる 抗 左走

又まわりすもまの 白風 一船

さきも小角とむねるままらる 一藏

むくまうらうらめくくらの花火あま 松子

羽雲の山の天狗 くらこみけ 志舟

かまのまらん海とくうあ占美 上走

しめり縁組志りー ともろん 一藏

ろくほとまらと漢又よそ大上産 志舟

よしほととたうすあまそいあ度 松白

肉食よ牛をも命や折ーくーん 一船

げからあらのらの 人の世中 一藏

廻文と鏡目ーまの念御後 志舟

ほくぬく後のもゆの 松 松子

秋の月夜ふきかて 友一の志
狐をいことあとの 夕暮の
かうとうとうなまゆらみ人のる 白友
茶のおりてうさうりこねの音 在意
云るをとりり坊の船あけ 松舟
とく舟のあとのしづか 一船
草花たう素石の白まき 一鑑
昔もいと雲みたり松の声 吾宗
焼たいたり少里又さのよの音 松舟

船のくまむい達の 水上 舟
舟の者ハセるりて 陽る 上矢
溪谷やみる徒舟の 秋風 心友
ぬきまよぬきぬき月の下 在意
目さしとくえして 舟の 舟
舟の根よまの 舟の 舟
思ふ石の流ハくらの 舟
舟のやまの 舟の 舟
舟のやまの 舟の 舟
舟のやまの 舟の 舟

舟のやまの 舟の 舟
舟のやまの 舟の 舟
舟のやまの 舟の 舟

蘇めども白濁はまらせそくまらうあ
うげとそまらう。 蜀人八守 卜尺

看極つらき眼のほげとこらう 正老

月のさしともおこるまうこらう 在老

を以中らふまうこらう 如 松何

志をこく教ふそく傷をまうとる 吾案

物まらとれうまう門をこく下屋を 一職

そあしとあらうまう 繩付 一節

飲者のそあしよりそあしは月あらて 松

車かすまじら 車の上風 車

まらまら身くまらまら 車付車 上足

名ふ用然とてまらまら 如く 空

腕指や八合まらまら 舟 在老

すむる備時沖の 汐さる 松何

久々の天地日根綱乃 負 吾案

七歩のうちまらまら 鷲 吾案 一職

持てまらまらまらまら 一は年中月一節

素直所謂 大法也あり松

一町のそとありし木をきりて
礎石をとりて
礎石

ト又十石 石炭十石 正友十石

松岡十石 一藏十石 紙筆十石

一船十石 志斗十石

左色十石 松子十石



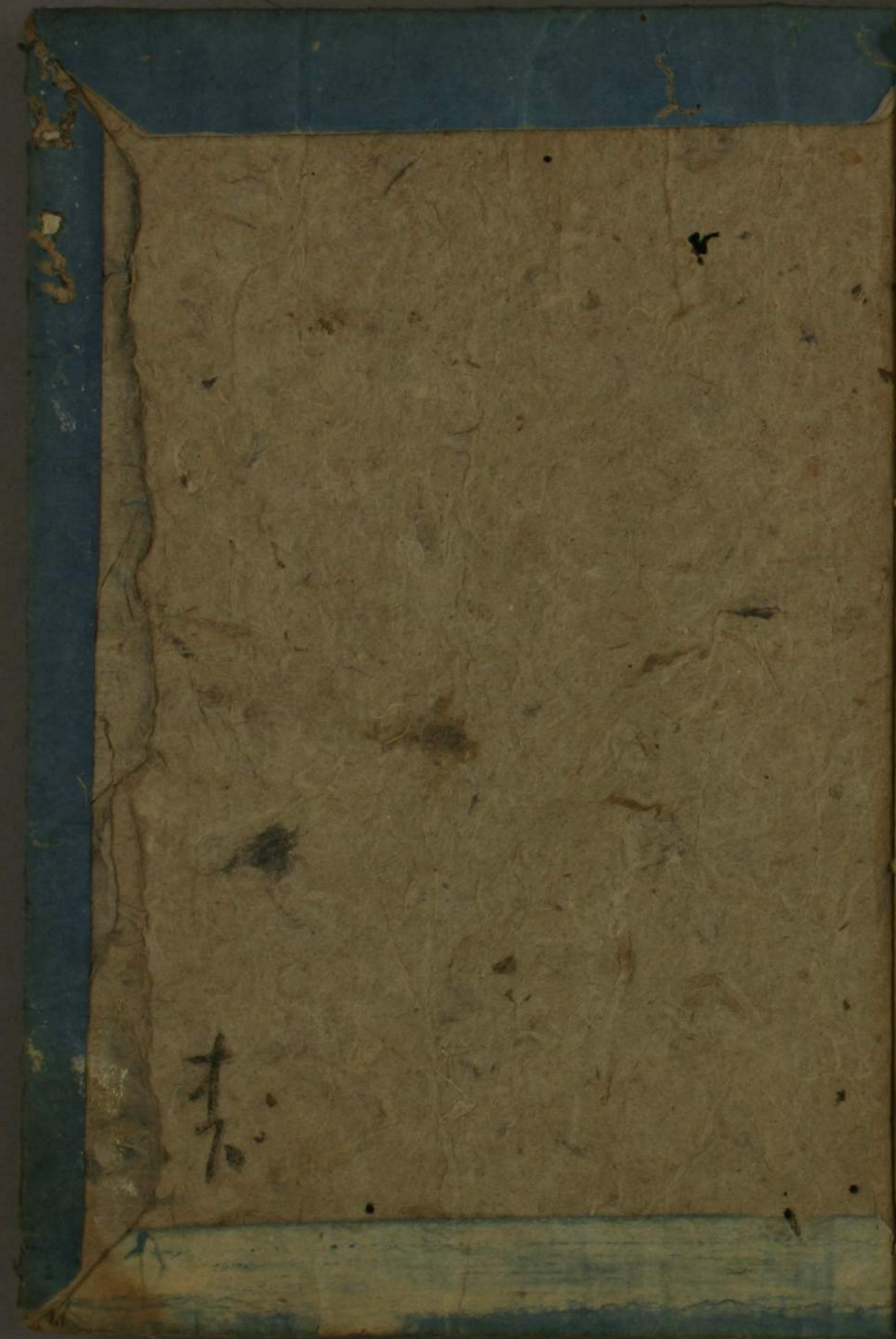
此談林十百韻ハ上卷ニ欠本

十九八

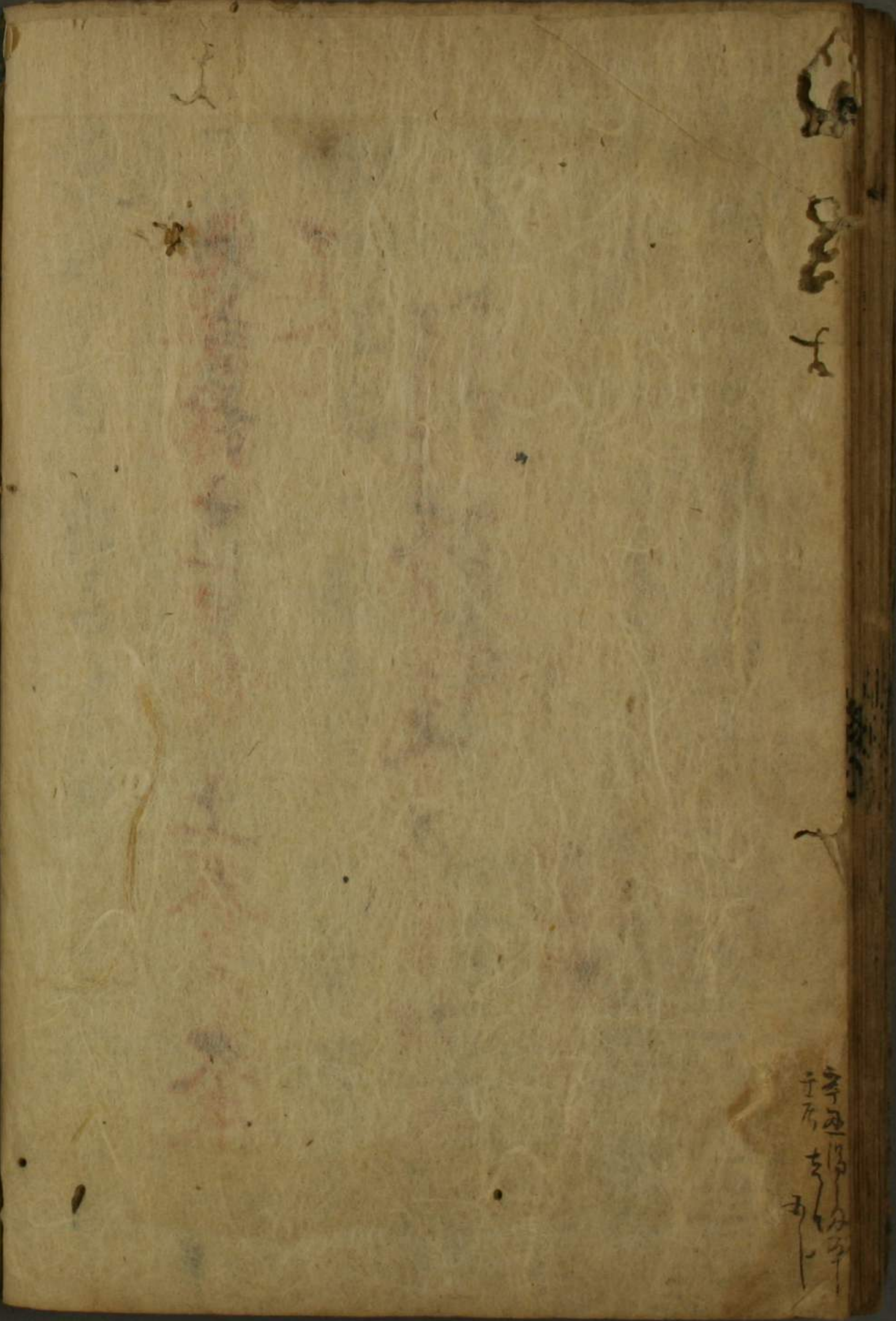
辛丑文月廿七日湯山寫切通
千石店ニテ求之

連城亭

Handwritten marginal notes on the left edge of the left page.



木



孝
子
志

